

最優秀賞

## 壁があつてもつながつている

坂戸市立入西小学校2年

鳥飼 勁介

ぼくには壁ができた。今まではないと思っていたのに、二年生になってきゆうに壁ができてしまった。それは、学校に行きたくても、今までどおりには学校へ行けないってこと。しんがたウイルスがはやってるから、生まれつきしんぞうにびょう気があるぼくは体のしんぱいがあつて行けなくなつてしまった。くやしかつた。なんでぼくだけ行けないの。お友だちは行つてゐるのに。さみしかつた。みんなと同じようにとう校したい。みんなとあそびたい。あとから聞いたたら、お父さんも母さんもくやしかつたんだつて。

ぼくたちはがんばつた。おうちでお母さんといっしょにべんきょうした。すてきな絵がかけたよ。おもしろい文も書けた。音読も上手にできるよになつたよ。「ああ、クラスのみんなにも見せたいな。」ぼくはそう思つていた。たんになの先生はなんて言つてくれるかな。こころの中でこつそり考へていた。

ある日、学校の先生かられんらくがきて、オンラインでクラスのみんなと朝の会ができることになつた。ぼくはドキドキした。はずかしいのとうれしいのとごちゃまぜだつた。でもワクワクが一ぱんだつた。ぼくの壁に、はしごがかかつて、まどが

できたみたいだつた。

「おはよう。」

「おはよう。」

そのまどから、ぼくたちのキャッチボールがはじまつた。壁があつても、ちゃんとまどからみんなの顔が見えるよ。うれしいな。「すきなたべものはなに？ぼくはラーメンが大すきだよ。」

クラス三十二人みんなのすきなたべもの、すきなあそび、すきな本も、ぼくは知つてる。

ぼくにはまだ壁があるけど、先生やクラスのみんながかけてくれたはしごは、今もしつかりつながつている。まどからとびこんでくるあつたかいことば。わらい声。壁があつても、ぼくはちゃんとみんなとつながつている。

(審査評) 良い作品は頭の中で考へるだけでは成立せず、経験と感性と表現力が相まつて生まれるものです。鳥飼勁介君の作品ではコロナでクラス仲間に出会えない中、家でがんばつてきた事やオンライン授業が始まつて感じた事がみずみずしく綴られてゐます。彼を取り巻く両親や先生・クラス仲間の温かい視線が目に見えるかのように迫ってきます。勁介君には「感性を失わないで」「すくすく成長して」など勝手な期待を呼びさます作品でもあります。

小幡真吾